

書名：アメリカ素描

著者：司馬遼太郎

出版社：新潮社

出版年月：2008年10月

総ページ数：476ページ

ISBN：9784101152363



推薦者

津田芳見

鳴門教育大学大学院教授

特別支援教育専攻

昨年夏から息子がワシントンD. C. にて仕事をする事になり、家族とともに渡米した。それに伴い孫は、アメリカの小学校の新1年生となった。1クラスの約半分は、英語を母国語としない児童とのことである。担任の先生は、中国系アメリカ人の若い女性である。授業は、視覚支援型というか、体験型というか、見て聞いて経験して学習する。つまり爬虫類のところでは、トレーナーらしきスタッフが4～5mもありそうな大蛇や、イグアナや亀など連れてきて子どもたちに身近に経験させ、子ども達大興奮という具合である。また、各国文化交流的イベントが次々と催されている。ハロウィーン、グラウンドホッグデイ、Diversity Night、International Night、などなど色彩豊かで歌あり踊りあり、大変楽しそうである。

こういう状況を、見ているうちに、アメリカについての書物を読みたくなった。数え切れないほどの書物があるであろうが、昭和な人間である私は、司馬遼太郎の「アメリカ素描」を読んでみることにした。この本は、昭和60年に新聞に掲載されたものである。カリフォルニアと東部諸州を40日ほど旅をただけの成果としてタイトルもアメリカ素描というつつましい表現となっているという。亀井俊介氏は、「戦後四十年たった時点での、そして日米関係が経済摩擦どころか文化摩擦までいわれるようになった時点での、アメリカ認識の確認の意欲も著者にはあったのでなかろうか。著者はアメリカの『原型』を考え、それが現在の状況にどのようにあらわれているかを検討し、その意味するところを日本人に語り明かすことに心をくだしている。」と解説している。

表紙を開くと、ニューヨーク市内を散歩する司馬遼太郎氏の写真から始まり、ロサンゼルス、カルフォルニア州、マジソン街、ウォール街、ブロードウェイ、ハーレムと続き、ワスプの本拠地ボストン、独立記念日のワシントン、などなど24ページの写真が掲載されている。写真からの視覚的情報をながめつつ、本文を読み進むと、アメリカの国の原型と、それが現在の状況にどのように表れているのか理解しやすい。アメリカは多民族国家である。作者は「さまざまな人種がオデンのようにそれぞれ固有の形と味を残したまま一つ鍋の中に入っている。」としている。

